

『英草紙』第九篇における高師直像の成立

——並木宗輔の太平記物浄瑠璃との関係をめぐって

王 順鑫

日本の江戸時代において、中国明清白話小説が数多く導入され、江戸時代の文学に多大な波紋を呼び、特にいわゆる「読本」という近世小説ジャンルの成立に拍車をかけた。都賀庭鐘の手による『英草紙』が、明清白話小説の最初の翻案作であり、読本の嚆矢と見なされている。

とは言え、『太平記』と深い関係があることも、『英草紙』の特徴の一つである。つまり、読本は白話小説を翻案するというもののみならず、『太平記』を踏まえることによって出発したジャンルでもある。明清白話小説を読本成立の「外来因」とすれば、『太平記』を始めとする日本古典文学の文脈が「内在因」と言える。

『英草紙』と『太平記』との関係について、山口剛氏、中村幸彦氏、木越治氏、井上泰至氏、丸井貴史氏などの先学達は、緻密な典拠論を中心に、研究を進めてきた。しかし、このような取り組みにもかかわらず、二つの問題点が取り上げられる。第一、『英草紙』第九篇と『太平記』との関係について一考の余地がある。第二、『英草紙』の全体像からその成立における『太平記』の位置付けという全体的な把握が欠けている。それを踏まえて、本論文は『英草紙』第九篇と並木宗輔の太平記物浄瑠璃との関係を論じた上で、『英草紙』成立における『太平記』の位置付けについて考察してみたい。

結論からいえば、従来、「異色を見せた」と思われた『英草紙』第九篇における高師直像の変転が都賀庭鐘の手によるものではなく、並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏将軍二代鑑』から取ったものである可能性があり、両者の受容関係が検討すべきである。また、『英草紙』における出典が分かる人名の46% (34/76) が『太平記』によるものであり、都賀庭鐘は『英草紙』の作中人物を創作した時に、『太平記』に人名素材を探る傾向が最も強かったのである。それが正に、都賀庭鐘が出した最初の、明清白話小説の翻案方法である。

『英草紙』第九篇における高師直像の成立

——並木宗輔の太平記物浄瑠璃との関係をめぐって

中国人民大学 王 順鑫

はじめに

日本近世中期において、伝入された白話小説の内容を日本の文化環境に移植する「翻案」を基本的な方法とする「読本」が誕生した。『英草紙』が読本の嚆矢として読本史に重要な位置を占める作品である。『太平記』と深い関係があることも、『英草紙』の特徴の一つとして認められている。丸井貴史氏の論を借りて言えば、読本は『太平記』を踏まえることによって出発したジャンル¹でもある。中国白話小説を読本成立の「外来因」とすれば、『太平記』を始めとする日本古典文学の文脈はまさに「内在因」とであると言える。それ故に、『英草紙』において、「外来因」と「内在因」は如何に働きあつたかという問題は、読本の成立に関わる重要なものであろう。本稿は、『英草紙』第九篇における高師直像の成立を通して、それと並木宗輔の太平記物浄瑠璃との関係を論じた上で、「内在因」という視点で都賀庭鐘の翻案ぶりについて考察を試みる。

一、『英草紙』第九篇における高師直像の問題点

『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」（以下は「高武蔵守」）は『古今小説』巻九「裴晋公義還原配」（以下は「裴晋公」）を翻案し、舞台を『太平記』に置き、高師直の逸話として成立させたものである²。「裴晋公」において、裴度像には主上の無道に能く諫言できる主上に信頼されないようになった時に潔く朝廷から身を退く不本意ながら人妻を奪ってしまうことを知った後その人妻を帰らせるという善玉のイメージが強い。「高武蔵守」における高師直を造型した時に、都賀庭鐘が殆ど「裴晋公」の対応箇所を翻案した。それ故に、「高武蔵守」における高師直も善玉として描き出されている。

しかし、先学達にこの一篇の出典と思われた『太平記』における高師直像は、決して善玉と言えるものではない。和田琢磨氏³、谷垣伊太雄氏⁴の研究によれば、『太平記』においては師直批判という基本線は確実に押さえて、悪逆無道の高師直像を中心として叙述を展開した。特に『太平記』二十一「塩冶判官讒死事」において、塩冶判官高貞の妻に邪恋をして、彼女を奪うために讒言して、結果的に高貞一家を滅亡させる高師直の悪役像が語られている。高師直の悪逆無道を批判する傾向は、語り手の評にも読み取れる。

このように、『太平記』から『英草紙』第九篇「高武蔵守」まで、「悪役」か

ら「善玉」へという高師直像の反転が明らかである。山口剛氏⁵、中村幸彦氏⁶、井上泰至氏⁷などの先学はその問題を意識したが、殆どそれを都賀庭鐘の改編か虚構による異色として認識している。

二、『英草紙』第九篇と並木宗輔の太平記物浄瑠璃

『太平記』巻二十一「塩治判官讒死之事」は、それ自体で完結性を持った「塩治判官滅亡の物語」として太平記から切り離して鑑賞することも可能である故に、近世初期でそれを取材し、再創造した作品が多く見える⁸。その中の多くは高師直を悪役として造型したが、『尊氏将軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦剣翹』はそれらと全く異なる立場で高師直像を描いている。

『太平記』と「高武蔵守」、『尊氏将軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦剣翹』における高師直像を対照比較すれば、結果は下表の通りである。

作品名	『太平記』	「高武蔵守」	『尊氏将軍二代鑑』	『狹夜衣鴛鴦剣翹』
高師直像の性質	悪役	善玉	善玉	善玉
人妻横奪事件をめぐる描写	好色で意欲的に奪う	不本意ながら奪う、後で帰らせる	不本意ながら奪う、後で帰らせる	不本意ながら奪う、後で帰らせる
高師直と足利直義との関係性	対立関係	対立関係解消	対立関係解消	対立関係

まず、『太平記』には、高師直が悪役として描かれているが、「高武蔵守」、『尊氏将軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦剣翹』には、逆に善玉として描かれている。次に、『太平記』には人妻に邪恋をする高師直の好色ぶりを描かれているが、「高武蔵守」、『尊氏将軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦剣翹』には、高師直は人妻を奪うが、それが不本意ながらの横奪であり、後で帰らせる。最後、『太平記』には、権力闘争で高師直と足利直義が対立関係に置かれて、『狹夜衣鴛鴦剣翹』にもそのような設定が見える。それに対して、「高武蔵守」と『尊氏将軍二代鑑』には、高師直と足利直義との対立関係は解消されてしまう。このように、悪役から善玉へという高師直像の反転が『英草紙』第九篇「高武蔵守」の以外に『尊氏将軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦剣翹』という太平記物浄瑠璃にも見える。そして、人妻横奪事件をめぐる描写についても、「高武蔵守」、『尊氏将軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦剣翹』の類似性が認められる。

『尊氏将軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦剣翹』は並木宗輔の手による太平記物浄瑠璃であり、それぞれ1728（享保十三）年、1739（元文十三）年に当時大阪に

も名高い歓楽街道頓堀にある豊竹座にて初演された浄瑠璃作品である。従って、『尊氏將軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦劍翹』は正に 1718（享保三）年に大阪に生まれた都賀庭鐘の身近な劇作品と言えよう。さらに、『英草紙』（1749 年）出版以前に、両作の脚本がすでに大坂で西沢一風によって刊行された。それ故に、「高武蔵守」における高師直像の成立の背後に、近世における太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』或いは『狹夜衣鴛鴦劍翹』の影響があったと考えられている。

都賀庭鐘が当時の浄瑠璃、歌舞伎などの近世文芸に相当の関心を持っていたことは、『英草紙』第九篇「高武蔵守」以外の作品にも窺える。『英草紙』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」に見えた安徳天皇女体説は、1747 年に大坂竹本座にて初演された浄瑠璃『義経千本桜』二段目に類似したことと、また同篇に源義経の兵法の師である鬼一法眼の姓を「吉岡」としたのは 1731 年に大坂竹本座にて初演された浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』によることは、中村幸彦氏の注釈によって示されている⁹。そして従来出典不明とされた『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」における「蘇朴汁を飲んで吐血を見せかけた」という趣向は当時の歌舞伎演出技法から借りたものと考えられている。このように、都賀庭鐘と大坂浄瑠璃との近い関係が認められよう。それを踏まえて、都賀庭鐘は並木宗輔の太平記物浄瑠璃を大阪豊竹座によって受容したとしても不思議ではない。

終わりに

『英草紙』における『太平記』の受容については、中村幸彦氏が綿密な注釈を付けて、第一・三・五・七・九篇と『太平記』との関係を指摘している¹⁰。その後、井上泰至氏は、『英草紙』第一篇・第七篇と『太平記』関係軍書との類似を論じている¹¹。また、川田真輝氏によれば、都賀庭鐘が『太平記』流布本系に加え、天正本系をも熟読し『英草紙』第三篇に利用したようである¹²。さらに本稿により、『英草紙』第九篇における高師直像の構想は並木宗輔の太平記物浄瑠璃から受け継いだものであることが明らかになる。このように、『英草紙』の生成において、太平記物（『太平記』及び『太平記』関係作）の働きが注目に値する。

『英草紙』における太平記物の受容には、一つの大きな特徴が見られる。『英草紙』において登場した人名は 143 個と数えられる。現在までの研究成果を踏まえて、出典不明な人名（67 個）を除けば、『英草紙』における人名の 45%（34/76）が太平記物によるものである。それに対して、物語の内容的にはそれほど太平記物を参照していないようである。端的に言えば、都賀庭鐘が『英草紙』の作中

人物を創作した時に太平記物を人名参考書として使って、そして太平記物に人名素材を探る傾向が最も強かったようである。

活気を喪失した保守的な文壇に直面した都賀庭鐘が思い出した打開策は、中国白話小説の富んだ小説性を借りることであった。とは言え、翻訳・訓訳しても所詮外来文学という分野にとどまるので、それを外来文学から離れさせ、日本文学の範疇に入れる工夫が求められた。都賀庭鐘の場合は、「白話小説から大体な筋を借りて、本国の風俗・地名・人名を加える」という中国白話小説日本化の翻案方法を見せた。『英草紙』の場合は、都賀庭鐘が人名を構想した時に、特に太平記物を愛用した。

とは言え、そのような中国白話小説と太平記物との結び付けが、都賀庭鐘の独創ではない。日本において生み出された唯一の本格的な演義小説である『太平記演義』は既に、『太平記』と中国白話小説を直接的に結び付けた。しかし、岡島冠山と都賀庭鐘との間に、大きな相違が見える。唐話学者である岡島冠山は、日本語の『太平記』を白話文で翻訳する過程に重心を置いた。それに対して、小説家である都賀庭鐘が翻案した時に、物語の新鮮さを考慮に入れなければならないのである。従って、『太平記』のみならず、並木宗輔の太平記物浄瑠璃のような新鮮味に満ちた太平記物へも関心を寄せたのであろう。それこそが、唐話学者である岡島冠山と異なって、小説家である都賀庭鐘が完成させた中国白話小説と太平記物との結び付けに現れた異色である。

注

¹ 丸井貴史「初期読本と浮世草子：白話小説利用法からの検討」、『和漢比較文学』（65）所収、2020年8月。

² 中村幸彦・高田衛・中村博保校注『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（新編日本古典文学全集第78巻、小学館、1995年）、第176頁。

³ 和田琢磨『「太平記」生成と表現世界』（新典社、2015年）、第377頁。

⁴ 谷垣伊太雄「高師直考―『太平記』を中心に―」、池上洵一編『論集 説話と説話集』（和泉書院、2001年）所収。

⁵ 山口剛「読本の発生」、『山口剛著作集』（第二巻、中央公論社、1972年）所収、。

⁶ 前掲『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』、第592-593頁。

⁷ 井上泰至『近世刊行軍書論』（笠間書院、2014年）、第250頁。

⁸ 鈴木登美恵「太平記「塩冶判官讒死事」をめぐって」、『中世文学』（53）所収、1981年。

⁹ 前掲『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』、第105頁。

¹⁰ 前掲『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』所収『英草紙』第一・三・五・七・九篇の頭注と解題において、中村幸彦氏が『太平記』との関係を指摘している。特に、第一篇の頭注において、『太平記』との字句上の比較を行っている。

¹¹ 前掲『近世刊行軍書論』、第241-254頁。

¹² 川田真輝「『英草紙』第三篇の後醍醐帝批判：庭鐘の『太平記』利用に即して」、『国文学攷』（253）所収、2022年12月。